

富士塚：江戸中に造られた小さな富士

18 世紀後期、富士講は江戸（現在の東京）の町や周辺の国々に富士塚を造るようになりました。これらの富士塚は単なる富士山の縮小模型ではなく、富士山の霊力を有するこの山の「写し」でした。これらの塚には山頂へと続く曲がりくねった道や御中道といった富士山の重要なランドマークも盛り込むよう注意深く造られていました。富士山の実物とは異なり、富士塚には女性を含む全ての人が上ることができました。

最初の富士塚は、高田籐四郎が亡くなった彼の師である富士講の指導者、食行身禄（1671–1733）に捧げる意味を込めて造ったものでした。造園師と庭師を生業としていた高田は、富士山麓から火成岩を調達し、地元の神社の境内に富士山の複製を完成させました。この富士塚は 1779 年に一般公開され、富士講と繋がりのない人たちの間でも話題となりました。その後、江戸とその周辺には、江戸時代（1603–1868）の終わりまでにもう 20 基ほど、19 世紀後期から 20 世紀初期にかけてさらに 40 基ほどの富士塚が築かれました。